平凡な夏のイベントに頼らない甘い展開

一条　灯夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平凡な夏のイベントに頼らない甘い展開

【Ｎコード】
Ｎ８５５６Ｖ

【作者名】
一条　灯夜

【あらすじ】
図書委員としての委員会活動に真面目に参加する主人公と、その恋人の千尋先輩。確かに夏はイベントが多い季節だけど、そんな特別なことばかりじゃないのも事実。ありふれた日々の中でも掴み取る、甘い展開。

目の前にある本棚で、同じ分類コードのハードカバーの高さが会わないのが微妙に気になる。高さ順に並べたいけど、それだと五十音順には並ばない。眼鏡を軽く掛け直し、腕を組んで考え込んでも、良い案なんて浮かばなくて、代わりに別のとりとめも無いことが頭を過ぎる。例えば、夏っていう季節が恋の味方だなんてのは、俗説だと思うこととか。

確かに祭りに花火とイベントが多いのも事実だけど、中学にもなれば、祭りの屋台のお好み焼きよりちゃんとした店の方が味が良いのは分かっているし、打ち上げ花火は見るのが一苦労で、手持ち花火はやれる場所も少ない、なんてことに気付いている。旅行に行こうにも、バイトの出来ない中学一年の僕には先立つものが足りてない。

そもそも、部活に委員会に塾に宿題と、真面目な学生の夏休みには時間的余裕も社会的優しさも足りていない。僕としてもその類に漏れず、今日も今日とて学校の図書室で、客も居ないのに午後五時の下校時刻まで店番の任務がある。とはいえ、本は好きだし、学校設備の中では職員室に次いで空調が整っているから不満は無いんだけど……。

敢えて繰り返すと、僕には不満が無いんだけど、問題は僕のパートナーがどう思うか、だ。特に夏休みに入ってからは、図書委員の当番のパートナーとしての意味以外にも、もう一つの重大な意味が出来ているんだし。

「ねえ！」

「はい？」

背中から投げられた大きな声に、僕は体ごと振り返る。六人掛けの机に突っ伏している千尋先輩は、顔だけを僕に向けていた。腰の少し上まである長い髪は、無造作に机に広がっている。そんな長い

髪なのに顔がはっきり見えるのは、前髪が眉の少し上で横一直線に切りそろえられているからだ。本人は失敗したって言ってるけど、それはそれで可愛いと思う。面と向かっていったら、照れた顔で頭突きされたけど。

「な～んで私達が、こんな所にいるのかなぁ～？」

千尋先輩は、ちょっと恨みのこもった視線で僕を見た。

「なんで？」

僕は逆に問い返す。千尋先輩だって、理由は百も承知なはずだから。

「図書開放日に、真面目に図書委員として活動してるせいだろ～？」

ゆっくりとした動きで立ち上がって、僕に近付く千尋先輩。不満そうにも眠そうなだけにも見える目は、標準よりはちょっと細い一重瞼だ。でも、顔全体が引き締まっていて、それをマイナスに感じさせない。というより、むしろ単純に、バランスが取れた綺麗な顔だと思う。レトロと評されることの多い女子の夏服のセーラーだけど、長髪長身痩身麗人で黙っていれば大和撫子の千尋先輩には大層似合ってることだし。

「そうですね」

そう言って微笑みかけると「どーして、そこでにこやかに返すかなぁ！」と、ちょっとヤケになった様な声が返って来た。

「うん？」

小首を傾げた僕と、それと反対側に首を傾げる千尋先輩。

「私たちがいなくて、なにか困った事態になると思う？」

「思わないよ」

僕は即答した。そもそも、真面目に図書室を開放している委員なんて全体の半分もいないと思う。風邪とか夏バテとか部活のスケジュールとか、適当に理由をでっち上げればとくに追求もされずにサボれるんだから。

「分かってるなら――！」

恋人同士の間合いを突き破って、ほぼ密着した千尋先輩は、僕の

ワイシャツの襟を掴んで前後に振った。グワングワンと脳が揺さぶられるが、僕としては慣れたものだ。三半規管の成長を褒めながら、どこか甘えたような顔をしている千尋先輩を微笑ましく見ていた。

「あー、もう、この暖簾に腕押し感はなんだろう？」

肩を落とす千尋先輩に「きっと、夏バテだよ」と、ずれた眼鏡を直しながら僕は明るく答える。

「黙らっしゃい」

僕を指差してピシャリと言った千尋先輩だったけど、すぐに、ふにゃーっとか、ぐでーっとか、そういう擬音が合いそうな仕草で、僕にしなだれかかって来た。僕の両肩に手を添えて、左肩に顎を乗せ、伸し掛かる様な感じで。

本棚に背を預けて、抱きとめる僕。冷房の利いた部屋だからか、人の熱をはっきりと感じた。薄着の夏服だから、多分、余計に。

ちょっと、かなり、ドキドキしながら目の前の空間を見ている僕。

「ねえ、アンタ、本当に私のこと好きなんでしょうね？」

左耳が伝える甘い質問に「もちろん」と、僕は答えた。

でも千尋先輩は、僕の声を聞き流して「先週のデートだって、手を繋いだだけで一瞬身を強張らせたし、いきなり抱きしめたらすっごい警戒してたし、キス無しだったし」と、そこはかとなく恨みのこもった声で言った。

変な方向に行きそうな会話に頬を掻くと、急にガバッと身を起こした千尋先輩と正面から見つめあう形になる。

「って、照れすぎ。頬染めるな！　もう、なんなの？　その時々みせる、純情少年ぶりは」

僕の顔を見てから、つられた様に頬を染めた千尋先輩が、ゆっくりと一歩後ろに下がった。解けた感覚を名残惜しく思いながらも、そんなに顔に出てたのかな？　と、頬に手を当ててみる。十分すぎるくらい熱を持っている感覚に、苦笑いしか浮かばなかった。

でも、純情だって、仕方が無いじゃないかって思う。付き合った

経験なんて、これまで無かったんだから。
「なんて言うか」
「なによ」
ちょっと怒ったような千尋先輩の声に、ちょっと怯む。
「抱きしめたりとか、キスとか、して良いのかなーって」
照れ隠しに誤魔化すような笑みを浮かべて、僕は小さく首を傾げながら千尋先輩の母性本能に訴えてみる。
だけど効果は無かったみたいで「どーしてそこで弱気になる！」とのお言葉が返ってきた。
「草食系だから？」
「？おっしゃい、腹黒策士系の癖に」
「よくそんなのに惚れましたね」
「私は趣味が悪いんだ」
「威張って言うことですか」
苦笑いで答えた僕のすぐ目の前で、千尋先輩は腰に手を当てジト目で僕を見ていた。壁際に追い込んだんだから、逃がさないぞ、なんて台詞も聞こえて来そうな表情だと思う。
確かに告白してくれたのは千尋先輩からだったけど、好きと口にする回数じゃ今は僕の方が多いのにな。中々上手く出来ない。慣れていないから、どこまでがゴーサインなのか分からないのもある。千尋先輩が綺麗だから、ちょっと引け目を感じてしまうのも。
「……僕は趣味が良い方ですよ？　初めて惚れた相手が、千尋先輩なんですから」
僕は一歩踏み出して、千尋先輩の顔を覗き込む。少し困った様な顔をした千尋先輩だったけど、満更でもなさそうな顔だった。照れてるだけ、かな？
「大好きです」
はっきりと言って、ギュッと抱きしめる……予定だったけど、ちょっと目測を誤って、千尋先輩の腰じゃなくてお尻の辺りに手が触れた。慌てて手を離したけど、千尋先輩の額が一気に目の前に広が

りゴスッと鈍い音に脳を揺さぶられる。
「……事故なのに」
痛む鼻を押さえ、ちょっといじけて言いうと「余計悪いわ！」なんて、雰囲気ごと僕も壊しそうなツッコミが入った。
ごもっとも。
ゴホンと咳払いして、今度こそ腰と背中に腕を回し、千尋先輩を抱きしめる。ワンテンポ空いたからか、それともアクシデントのせいか、千尋先輩は照れて怒っているような顔をしていた。
「古典的名作では、鼻の高さを気にするみたいですけど、眼鏡は邪魔になります？」
探りを入れる意味でも、そんな風に問いかけてみたら「そんなの、自分で考えろ」と、素っ気無く言われてしまう。
このままでも良いのかも知れないけど、それじゃあんまりムードが無い気がして、普段言わないことをそっと耳打ちする。
「千尋先輩は、いっつも僕が本当に先輩を好きなのか確認しますけど、僕の方が不安なんですよ？　千尋先輩綺麗だし、すごく好きなんですから」
千尋先輩が嬉しいのを我慢する顔になる。ちょっと意地っ張りな所があるよな、って思う瞬間だ。そういう所も可愛いと思うのは、よっぽど惚れ込んでいる証明なのかもしれない。
タメを入れたらタイミングを失う気がして、勢いでキスしようとしたら、ある程度近付いた所で背伸びした千尋先輩の方から唇を合わせられた。柔らかな感触は確かに分かったんだけど――。
「どうだった？」
ちょっと上から目線で、満足そうに問い掛ける千尋先輩。
「あんまり良く分からなかった」
上機嫌に水を差したら悪いとはおもいつつも、僕は正直な感想を述べる。いや、なんか、こう、もっとドラマチックというか、そういうイメージで期待が大きすぎたせいかもしれないけど。
「コイツは……」

案の定、ちょっと呆れた顔をして、肩を竦めて見せた千尋先輩がいた。やっぱり失敗だったかと思っているうちに、千尋先輩は僕に背中を向けて、さっき座っていた椅子まで戻ろうとしている。
それが少し寂しいと言うか、もったいないって言うか、微かな喪失感を感じさせた。
「あんまり良く分からなかった！」
さっきより大きな声で言って、千尋先輩を背中からギュッと抱きしめる。お腹に腕を回して、千尋先輩の右頬に僕の左頬を摺り寄せる。
「にゃあ！　ど、どうした？」
驚いた様子で僕の腕から逃れた千尋先輩が、身構えつつ僕に向き直る。
ちょっと残念だと思う。抱き心地良かったのに。
「積極的になってみただけですけど？」
軽く小首を傾げた僕。
「極端すぎ！」
ちょっとジト目で僕を見る千尋先輩に「嫌でした？」と、尋ねてみる。すると、ハイテンションで「誰がそんなことを言った！」と小さく叫んだ千尋先輩にもみくちゃにされた。

なんか幸せだなーって思いつつ、抱かれ疲れたコアラのような心境の中で考える。
夏が恋の味方だなんて、やっぱり俗説だ。イベントは多くても、それなりにデメリットも多い。そもそも学生の身では、資金も時間も限られる。
甘い展開は、そんながんじがらめの普通の毎日の中で、なんとかして掴み取らなくてはならないのだ。

（後書き）

久しぶりの投稿になってしまいました。
まあ、あれです。
ちょっとひねくれてみました。
夏にイベントが多いのは分かるんですけど、参加しない夏祭りの駅を電車で通り過ぎただけなのに、窒息するかと思うような体験があったので、イベントに頼らない甘い夏の恋が書きたいと思いまして……。

いかがでしたでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8556v/

平凡な夏のイベントに頼らない甘い展開

2011年8月16日13時18分発行